



PM 2:30

原発事故で活躍した特殊注水車が野ざらし放置

中国&米国から友好の証しで緊急輸入されたのに…寂しい姿を発見撮

猛り狂う福島第1原発を冷却すべく、決死の覚悟で注水を続けた「キリン」号や「シマウマ」号のコンクリートポンプ車たち(写真左)については後述。日本を巨額の湖から救った英雄的な作業車たちが、なんら栄誉を与えられないことなく、じつは今、寂しく原発横の駐車場にうち捨てられている。

福島第1原発が次々に吹っ飛び、もくもくと煙を上げる映像が届いてから8カ月たった。ヘリコプターから水をぶっかけるという原始的な注水方法が見事に失敗し、もう日本は終わりかもしれないと誰しも思ったものだ。続いておこなわれたのは、地上からの放水といふことになったローテクなやり方。自衛隊、警備庁機動隊、東京消防庁などの決死隊が屈折放水塔車などを使っ

て勇敢に戦った。しかし水は拡散してなかなかタイレクトに届かなかった。そこで投入されたのが、これらのコンクリートポンプ車だ。

本誌が入手した3月28日作成の「キリン」作戦全体構想。なる東電内部資料による、勇敢にも最初現場へ突入したのは「キリン」号だった。同日午後5時から約3時間、車体に積んだ水を注ぎつけた。続いて27日に現地に入ったのは「シマウマ」号だ。岐阜県那都市の企業のもの、大自然の中でのみびりと暮らしていたのだが、急遽駆り出され、3号機に向って水を注ぎ込んだ。4月上旬に中国からやってきたのは「大キリン」号だ。東電の要請を受けた中国の建機大手・三一重工

が、日中友好の架け橋にと無償で提供してくれたのだ。しかし東電の内部資料を見るとほかと頭と違い、信頼度の欄に△印がつけられていた。ほかの代替車両がないから仕方なく中国車を使っていたということなのか。

当時、「大キリン」号に乗って放水をおこなった作業員に話を聞くことができた。中国から技術者が来てくれたんだけど、みんな放射能が危ないから現地に行ってくれない。そこで、6人が千葉県柏市で日間にわたってセットの仕方やリモコンの操作方法を教わったんだ。現場はまだ瓦礫の山だったよ。まずリモコンを使ってアームを伸ばした先端にはカメラがついていて、モニターを見ながら左右に動かし、使

んだ。本当に怖かったな。ちなみに国家存亡の危機に際し、ポンプ車たちにこんな動物の名前をつけただのは、見事な壮さぶりを勇を上げた海江田万里経産相、当時である。

原発近くに設置されている彼らの車体に時計を近づけてみた。「シマウマ」号の運転席後ろの窓には、毎時29分という高い数値が検出された。彼らは放水中にかなりの線量を浴びてしまっているかもしれない体にならなりましたよ。どうして東電は彼らに放水をやらせたいのさ。彼らは広報部に聞かされた。場所は社内の待機させていただけです」と言う。「東電さん、もしかして再臨界に備えるための待機させ



取材協力：ヨココ（ライター）



キリン号

58年のアームを持つ、訓練中に7名がコンクリートが落下し、作業員が何人も現場放棄するなど切迫した状況の中、この車は決死隊の活躍を支えた。



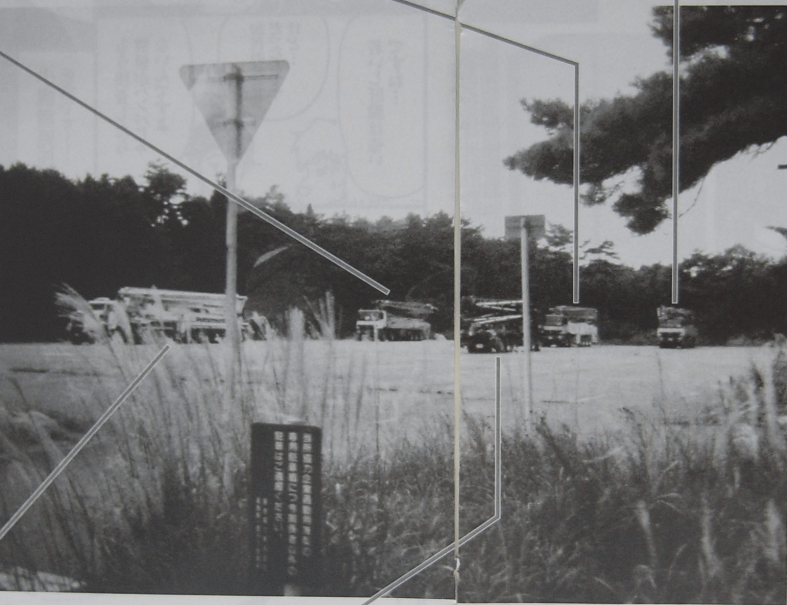
ソウさん2号

「大キリン」以外はすべて独・プツマイスター社製。本来は発電所やダム、高層ビルの建築などに使用される。この車両のアームは52m



大キリン号

上海から10日かけてやってきた。アーム長は62m。7名がコンクリートを持って作業車に乗ったため、後に「ソウさん1号」に改名された。



大キリンの運転席には、中国から来た作業員が座り、中国語で話している。運転席の後ろには、中国語で書かれた看板が貼られている。

メーカーは東電に「1000000」の看板を貼らせた。これは、東電の社員が貼ったものだ。看板には「1000000」の数字が書かれている。



マンモス号

世界最大級の70mのアームを持つ、日本に到着後、リモートコントロール装置を取りつけ、無人化に改造。6月30日に現場へ投入された。



シマウマ1号

この車両は、なかでは珍しい。東電の内部資料では信頼度がいちばん高い。この車両だけ正統のナンバーがついていた。



バンパーやタイヤなどはそれほど線量が高くなかったものの、運転席後ろのガラスを通して計測しやすそうなタンク状の部分に線量計を当てると毎時29.5%を検出。驚くほど高い数値だ。